

北中ベビーラッシュに思う

今の北中は「ベビーラッシュ」です。先月の二十一日にはN教諭に第一子の男の子、ゴールデンウィーク真っ只中の三日には、K教諭に第二子の女の子が誕生しました。そして、今日はI教諭に双子の赤ちゃんが誕生する予定です。その後には、K教諭に第二子の誕生が控えています。世の中の少子化問題もどこ吹く風。北中では新しい命が次々と誕生して、何ともめでたい限りです。

こういう時は赤ちゃんばかりが目まぐるしますが、私は「親」になった人たちにも注目したいと思っています。とりわけ、N教諭とI教諭は今回のベビー誕生で、初めて「親」になるわけです。言葉で説明するのはなかなか難しいのですが、我が子の誕生に天にも昇る気もちの一方で、本当に親になったのだからかという不思議な感覚にもなります。それでいて、大きな責任が徐々に湧き上がってきます。一生のうちに、たびたび味わえる感覚ではないことだけは確かです。

やがて、生まれた我が子の成長と共に、「親」としての自覚が徐々にはつきりしてきます。目を開けた時、笑った時、泣きわめいて意思表示した時、寝返りを打った時、ハイハイした時、つかまり立ちした時、言葉らしきものを発した時、よちよちと歩いた時……「親」とっては全てが感動であり、その日が記念日になるのです。

やがて、我が子は家庭から飛び出し、園や学校という社会の中に飛び込みます。家族以外の人たちとの関わりの中でいろいろな経験をjして成長していきます。そんなときも「親」は気が気ではありません。「仲間とうまくやっていけるだろうか」「苦しいことやつらいことに耐えられるだろうか」「危険から身を守るだろうか」……離れた所から心配しているのが「親」というものなのです。

今の皆さんには、「親」という存在がどのように映っているでしょうか。もちろん個人差はあるでしょう。思春期ということからすると、自分の身に降りかかる様々な問題に対処するだけで精いっぱい、**「親」**に対して改めて考えることはないというのjが正直なところでしょう。

私はそれでよいと思います。そういう時期があるのが普通です。今は自分のことに大いに悩み、苦しんでください。「親」はそれを静かに見守ってくれてはjずです。「木」の近くで「立」って「見」ているのが「親」ですからね。

「ベビーラッシュ」の北中ですが、「先生、おめでとう！」だけで済ませるのではなく、十数年前、あなたが生まれた時にも、あなたの「親」も至福の表情をしていたと想像してみてくださいね。

(五月七日 記)